

教師を育てた 言葉たち

No. 012

兵庫県立加古川南高校

上田慎志先生

うえだ・しんじ

◎教職歴14年。同校に赴任して4年目。2学年副主任。英語科担当。

兵庫県立加古川南高校 全日制／総合学科／1学年約240人／2018年度入試合格実績（現役のみ）：国公立大は、兵庫教育大、徳島大、都留文科大、山口県立大に4人が合格。私立大は、同志社大、近畿大、関西学院大、甲南大などに延べ193人が合格。



教 師になったばかりの私は、生徒と信頼関係を築けずに悩んでいました。今考えるとその原因は明白で、「教師は立派でなければいけない」「生徒の手本であるべきだ」と思い込み、生徒に一方向的に厳しく接していたことにありました。そんなある日、A先生が集会で自身の受験の失敗談を話し、生徒の共感を集めていました。A先生にそのねらいを聞くと、「**教師は神様ではない**。生徒と同じ目線で語らない」と言われました。その言葉に、自分に足りない点を指摘された気がしましたが、当時の私は自分の弱さを見せる勇気が持てませんでした。

6年目に初めて担任を持つと、悩みは一層深まりました。依然として生徒との関係づくりが苦手で、学級がまとまりませんでした。思い悩む中で思い出したのが、A先生の言葉でした。教師である以前に、自分は不完全な1人の人間である。それから目をそらして厳しく指導するだけでは、生徒はついてこない。そう気づき、生徒の目線で話を聞き、対話することで、関係性をつくり直そうと努めました。

効果は徐々に表れました。指導するんだという気負いがなくなって接すると、生徒は驚くほど本音で話してくれるようになりました。A先生のように時には失敗談を話すと、親近感を持ってくれる生徒が増えました。生徒との距離は少しずつ近づき、「あの先生は話をちゃんと聞いてくれる」と、生徒からの評判が聞こえてくるようになりました。

生 徒に素の自分を見せるという考え方は、教科指導も大きく変えました。私は、英語科教師

ですが、流暢に英語を話せないからと、文法や訳読を中心とした指導をしていました。生徒の前で失敗し、恥をかくのを避けるためです。

2年前、この問題に決着をつけようと、生徒に「私は、英語教師でありながら英語を流暢に話せない。それでも一生懸命に話すから、君たちも一緒に学んでほしい」と、思い切って伝えたのです。生徒からの信頼を失うのではないかと、内心は恐ろしくてしかたありませんでした。しかし、大勢の生徒が、私の話を真剣に聞いてくれました。

気持ちが吹っ切れた私は、生徒に英語で語りかけ、コミュニケーション活動を積極的に行うようにしました。次第に生徒も大きな声で英語を話し、授業後には集まって振り返りをする姿が見られるようになりました。質問に来る生徒も増え、以前より頼られていると感じるようにもなりました。

今も流暢とは言い難いですが、ほぼオールイングリッシュで授業を進めていると胸を張って言えるほど、私の英語力は伸びました。「失敗を恐れていては、成長もない」—— そのことが、私の姿を通して生徒に伝わるよう、努力しています。

こ れからの時代に生徒が大きく羽ばたくために欠かせないのが、自ら考え、行動する力です。その出発点は、自分の弱さを自覚し、目標を持って挑戦することだと思います。決して簡単なことではありませんが、これからも私自身が挑戦し続ける姿を見せて、生徒が一步を踏み出す勇気につながれば、教師としてこれ以上の喜びはありません。